様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２９３８

研究課題名（和文）中世北イタリアにおける河川交通と紛争・秩序

研究課題名（英文）Conflicts , order and fluvial trade in medieval northern part of Italy

研究代表者
高田　京比子（Takada, Keiko）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：４０２８３６６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中世のヴェネツィアの後背地を中心に、河川交通と紛争・秩序の関係を考えるものである。具体的には、イタリアから研究者を招聘して河川と都市の政治・経済関係の概観を得ると共に、ポー川の通行をめぐるヴェネツィアとクレモナの協約、ブレンタ川をめぐるバッサーノとヴェネツィアの関係を分析した。ヴェネト地方においては河川交通が重要な役割を果たしていたこと、12世紀のヴェネトのコムーネ間紛争は河川交通をめぐるものであったこと、ヴェネツィアだけでなく後背地の河川沿いの諸都市にとっても河川交通の維持は重要な事柄であったこと、河川交通の維持が時に紛争を緩和する働きをすることもあったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、都市国家が分立する中世の北イタリアにあって、各政治権力の境界を横断する河川に着目し、このような河川、特に河川交通が、都市国家を互いに協力や紛争に導く働きを担っていたのではないか、という展望を開いた点に学術的意義がある。また河川は港町と後背地を結ぶ経路として、さらに都市を形作る重要な景観的要素として、広く人と水の関係を考えていく上でも有効な要素である。本研究は河川交通が人々の生活・政治・経済に多くの影響を与えていたことを示しており、人と水の豊かな共生関係を構築していく上での指針となる点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This project examined the relationship between fluvial trade and conflicts or order of the region, focusing on the hinterland of Venice in the Middle Ages. Specifically, I analyzed a pact between Venice and Cremona regarding the free and safe passage of the Po river, and also the relationship between Venice and Bassano via the Brenta river. I also invited the three Italian professors in order to obtain an overview of the relationship between rivers and cities. The following things are verified: in the Veneto region, fluvial trade played an important role; the Communes of the Veneto region in the 12th century fought each other for the river traffic; the maintenance of fluvial trade was important not only for Venice but also for other riverside cities in the hinterland: thus the demand for the safe fluvial trade could sometimes mitigate conflicts between cities

研究分野：イタリア中世史

キーワード：イタリア中世史　ヴェネツィア　河川　ポー川　ブレンタ川　ヴェネト　都市国家　紛争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、次の二つの関心が交わるところに成立している。ひとつは、筆者が今まで行ってきたヴェネツィアを中心とする中世イタリア都市史の文脈である。もうひとつは、筆者が５年間分担者として参加した科学研究費基盤研究（A)「中・近世ヨーロッパにおけるコミュニケーションと紛争・秩序」（代表：服部良久、2009-2013 年度）（以下：「科研プロジェクト」と記載）から得た課題である。

⑴東地中海貿易で栄えたヴェネツィアは、15 世紀以降イタリア本土に領土を拡大し、領域国家を築くことになる。この領域拡大が人目を惹くだけにいっそう、従来、それ以前の時代に関しては、ヴェネツィアの関心は、もっぱら海に向かっていたと考えられてきた。しかし、近年の多くの研究や筆者が文書館から得た情報は、13 世紀においてもヴェネツィアが、経済のみならず、政治・社会・司法など多くの領域に渡ってイタリア本土と積極的に関わっていたことを明らかにしている。また従来、中世イタリア都市史は各都市個別の研究が多かったが、昨今は、より広域的視点に立った研究が蓄積しつつあり、本土支配以前のヴェネツィアを後背地との関係で捉える視点の必要性は常に感じていた。そのような中、次に述べる科研プロジェクトは、ヴェネツィア一都市から、ヴェネツィアを中心とする都市間関係史へと一歩を踏み出す、重要なきっかけとなった。また、科研プロジェクトの研究を進める上で、浮かび上がってきた河川交通は、鉄道・道路網の発達によって忘れ去られた前近代の重要な景観として、近年イタリア本国でも関心を呼んでいる分野である。とりわけヴェネト地方には複数の河川が流れており、そのいずれもが、海港都市であるヴェネツィアと内陸部・さらにはアルプス地方を結び付ける交通の要路であった。このような環境の重要性はヴェネツィアの森林政策を扱った K.Appuhn, *A Forest on the Sea*, Baltimore, 2009. でも指摘されており、河川交通は、ヴェネツィアと後背地の関係を見る上で、実り豊かな分野であると確信するに至った。

⑵筆者が分担者として参加した科研プロジェクトは、コミュニケーションを「伝達、理解、合意をめざす行為」と定義し、確立された制度ではなく、くり返し経験されるこのようなコミュニケーション・プロセスがいかに政治的・社会的秩序を維持または変化させるのかを追求してきた。そしてそこでは、紛争状況において、このような社会的・政治的コミュニケーションがもっとも濃密な状態で現れると認識されてきた。そこで、筆者は、この科研プロジェクトを遂行するに際し、分立する北イタリアの都市同士のあいだでどのような紛争が起こり、それがどのような手段で解決されるのかという点を、自身の研究課題とすることにした。都市間紛争とその解決の一例として、1308-13 年に起こった、フェラーラを巡るヴェネツィアと教皇庁の争い（実質的にはフェラーラとヴェネツィアの戦争）を取り上げたところ、この戦争の経緯は、河川（ポー川、アディジェ川）による通商という経済的要因が紛争の展開及びその結末において重要な位置を占めていたことを示していることが、明らかになった。日本に紹介された古典的紛争史研究では、中世ドイツの貴族と王権の関係や、中世フランスの修道院の所領を巡る争いなど、比較的経済（とりわけ通商）活動が活発でない地域の事例が蓄積してきたため、中世ヨーロッパの紛争研究において経済的要素はあまり省みられなかったように思われる。しかし筆者が取り上げたような地域においては、日常的に通商問題が重要な案件を占めており、戦争においても、武力・有力な仲介者を通じた外交交渉・経済的要素が、紛争を遂行したりそれを解決に導いたりするためのコミュニケーション回路として密接に絡まっていた。ヴェネツィアが他都市と関係が悪化した場合に制裁手段として頻繁に用いていた「通商停止」も含めて、経済活動と政治的紛争・秩序の関係をより広く、より綿密に考えていく必要がある、と思い至った。

２．研究の目的

ヴェネト地方には、東から順に、リヴェンツァ川、ピアーヴェ川、シーレ川、ブレンタ川、バッキリオーネ川、アディジェ川が流れており、さらにヴェネト地方の南ではイタリア最大の河川ポー川もアドリア海に注いでいる。ヴェネツィアはこれらの河川を使って内陸部の都市、さらにロンバルディアやアルプスを越えた北中部ヨーロッパと交易することができた。またヴェネトを始めとする内陸の主要都市は、これら河川の沿岸沿いにありヴェネツィアと河川で結ばれていた。したがって、河川は、ヴェネツィアと後背地の関係を明らかにするための有効な切り口となりうる。一方で、都市間関係・広域秩序の研究は、14～15 世紀に輪郭を表す「領域国家」の研究などで進みつつあるものの、それ以前の時代については今まであまり蓄積がない。さらに従来、13～14 世紀の都市間関係・紛争は、皇帝派・教皇派抗争など政治的な要因で説明されることが多く、これらの政治党派に関わらないヴェネツィアは、都市間関係史ではあまり考慮されなかった。しかし、分立する支配圏を流れる河川を、どのように調整して使用していたのかという視点で、北東部イタリアの都市間関係を見るならば、当然ヴェネツィアも関わってくる。そこで、本研究は、河川交通という視点で都市間の紛争と秩序を考えて行く。そのことによって、ヴェネツィアを含めた都市間関係史の構築と商業の視点から紛争史研究に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

１で述べた⑴⑵のふたつの研究動向、およびそこでの成果から得られた課題を統合して研究するには、ポー川、アディジェ川、ブレンタ川、シーレ川、ピアーヴェ川などアドリア海に注ぐ複数の河川にヴェネツィア及び、パドヴァやフェラーラ、ヴェローナなどの複数のコムーネがどのように関わってきたか、それらの河川交通のコントロールを巡って複数の都市の利害関係がどのように絡まって紛争が起こり、あるいはそれを収拾するために協約を結び、秩序が打ち立てられてきたかを追求することが有効である。しかし、複数河川すべてについて掘り下げた研究を行うことは難しい。そこで、研究期間内には、イタリアから研究者を招聘して、講演を依頼し、河川と都市の関係についての概観を得ること、地域を絞って史料に基づいた研究を進めること、の二つを目指した。

⑴現在まで、イタリア本国では、ヴェネト地方の主要な河川についての研究書が公刊されている。また河川をめぐる紛争についても古い外交史などでエピソード的に触れられており、現地の中世史研究者にとっては、周知の事実に属することも少なくない。そこでまずは、イタリア人研究者を招聘して、すでにイタリア本国で蓄積している河川交通と諸都市の政治的、経済的関係について概観を得ることにする。これは多くの研究蓄積があるヴェネト地方の河川交通と都市の政治経済的関係について、従来の研究で明らかになった点を整理するためでもある。具体的には、パドヴァ大学のダリオ・カンツィアン氏、ヴェローナ大学のジャン・マリア・ヴァラニーニ氏、ボローニャ大学のパオロ・ピリッロ氏の３名を５年の研究期間のうちに招聘する。

⑵都市間協約などの史料に基づいて自身の研究を進める。

①科研プロジェクトでも扱ったフェラーラはポー川下流域の重要な川港都市であり、ヴェネツィアとロンバルディア方面の通商には、通過が避けて通れない場所であった。そのため、1191 年から 1313 年にかけて多くの協約をヴェネツィアと結んでいるが、とりわけ 1258 年 1 月の協約は、次の点から興味深い。ここではフェラーラはヴェネツィア人及びヴェネツィアと往来する全ての商人にポー川での自由通行を保証することを約束しているが、「フェラーラの敵であるエッツェリーノ・ダ・ロマーノと共にいるヴェローナ人やマルカの他の人々」を、両者が戦争状態である限り、自身の領域に受け入れる必要はない、としている。つまりこの協約は、対エッツェリーノ戦争の最中に結ばれているのである。対エッツェリーノ戦争は、より広くは北イタリア諸都市の間での皇帝派と教皇派の争いに結びつく。そこで、この協約を手がかりに、紛争の最中にあって、複数の分立する支配圏を流れる河川をどのように調整して使おうとする試みがなされていたのか、あるいはなされていなかったのかを、ポー川の重要な都市である、マントヴァ、クレモナとの協約も視野に入れながら、明らかにする。

②バッサーノとヴェネツィアの関係をブレンタ川を軸に考察する。バッサーノはブレンタ川が渓谷部から平野に流れ出す、まさにその出口に位置する集落で、古代ローマ時代にまで遡るアルプス越えルートのひとつ、ブレンナー峠とヴェネツィアを結ぶ主要路の一つを押さえているという場所柄、中規模集落でありながら戦略上の重要性は明らかであった。ここでは、このようにブレンタ川を通じてヴェネツィアと結ばれている山裾の準都市が、ヴェネツィアのような海港都市にとってどのような存在であったのか、そのことがバッサーノと近隣の諸政治勢力との関係にどのような影響を及ぼす可能性があったのか、を考える。

４．研究成果

⑴研究成果のうち、もっとも重要なものは、イタリア人研究者３名を招聘して河川交通と紛争・秩序に関する講演会を行ったことである。招聘した研究者は、以下に述べる３名で、渡伊の機会を利用して、講演内容についての綿密な調整を行った。

①　まず、2016 年 2 月 23 日にパドヴァ大学准教授のダリオ・カンツィアン氏を招聘し、関西中世史研究会の協力を得て「アドリア海、アディジェ川、アルプスの間における資源管理と政治軍事的戦略（12～15 世紀）」というタイトルで講演会を行った（於：京都大学）。カンツィアン氏は東京での日伊国際シンポジウム（2016 年２月 21 日、22 日、「中世ヴェネトの領域史」、主催：2013-2017 年度科学研究費補助金・基盤研究(S)「わが国における都市史学の確立と展開にむけての基盤的研究」、研究代表者：伊藤毅）のために来日しており、その機会を利用して、関西に来ていただいた。カンツィアン氏はイタリア・ヴェネト地方（特にパドヴァ県、トレヴィーゾ県地域）をフィールドに、イタリア中世の政治制度、社会の変遷についての幅広い学識と綿密な史料検討に裏付けられた多くの業績を有している。最近は水と人の関係（河川・沼地など）を中心に環境史に関するプロジェクトも推進しており、また河川沿いのカステッロ（城、防備集落）についての個別研究も行っている。そこで、定住史の研究で培った知見を利用しながら、ブレンタ川、ピアーヴェ川などに利害をもつ政治勢力と河川の関係を概観してもらった。カンツィアン氏の講演では、12 世紀のヴェネトのコムーネ間紛争は河川交通をめぐるものであったこと、12 世紀後半には運河建設など河川資源をよりよく利用しようとする努力が各都市によって進められること、13 世紀には都市同士の衝突の中からヴェネツィアとパドヴァとヴェローナの三者がヒエラルヒーの上位に位置するようになることなどが明らかとなった。

②　翌年の 2017 年 12 月 2 日にはヴェローナ大学教授のジャン・マリア・ヴァラニーニ氏を招聘し、関西比較中世都市研究会との共催で「12～15 世紀のヴェローナとアディジェ川をめぐる政治経済的関係」と題する講演会を行い、日本史の大村拓生氏から「中世淀川水系と紛争・秩序―日本史の立場から」と題するコメントを得た（於：大阪市立大学）。ヴァラニーニ氏は、ヴェローナの都市制度史や領域史を中心に、ヴェネトの諸都市や景観、ヴェネツィアのテッラフ

ェルマ支配、トレンティーノ・アルト・アディジェのような山岳地域の歴史、公証人や史学史など各方面の研究を行なっており、夥しい業績がある。ヴァラニーニ氏には、アディジェ川河畔の都市ヴェローナを中心に、この都市が上流のトレンティーノの封建勢力や、下流の諸都市とどのような政治経済的関係を結んだのかを概観してもらった。アディジェ川をめぐるヴェローナとアルプス地方、ヴェローナと平野部、特にヴェネツィアとの関係が明らかとなった。

③　最後に、ボローニャ大学教授のパオロ・ピリッロ氏を招聘し、2018 年 12 月 2 日にイタリア史研究会との共催で「中世のアルノ川とトスカナ地方」と題する講演会を行った（於：京都大学）。ピリッロ氏は、中世トスカナ地方農村史、フィレンツェ領域国家形成史を専門とする。ヴェネト地方との比較の対象として、アルノ川とトスカナ地方、特にフィレンツェとの関係を概観してもらった。アルノ川との比較は、あらためて河川交通と紛争・秩序を考えるためにはポー＝ヴェネト平野が好都合であることが明らかになった。

④　これらの講演会は全てイタリア語で行われた。カンツィアン氏とヴァラニーニ氏の講演では、筆者が日本語訳を作成し、講演会では通訳をつとめた。ピリッロ講演では講演会後に講演と質疑応答の要約を作成して参加者に配布した。なおこれらの講演会の成果は、「河川をめぐる中世の政治権力と経済—イタリア（ヴェネト・トスカナ）と日本（畿内）—」と題する冊子にして印刷・製本し、配布した。

⑵史料に基づく自身の研究では、以下の研究を進めた。

①フェラーラとヴェネツィアの協約は、研究を進めるにつれ、その 8 ヶ月後に結ばれたクレモナ（ポー川中流の川港都市でフェラーラより上流）とヴェネツィアとの協約と密接な関係にあることがわかった。また当時の対エッツェリーノ戦争の中で、クレモナのシニョーレであるパッラヴィチーノとエッツェリーノは同盟関係にあったこと、従ってフェラーラとクレモナは敵対関係にあること、しかしクレモナとヴェネツィアの協約以降、クレモナはフェラーラと同盟関係を結ぶようになることも明らかになった。結局、1258 年９月のヴェネツィアとクレモナの協約は、クレモナとフェッラーラ（クレモナよりも下流）の敵対関係を背景に、クレモナがヴェネツィアを仲介として通商の継続のためにフェッラーラと友好関係を打ち立てようとしたものであった。また、ヴェネツィアとフェラーラの 1258 年 1 月の協約は、クレモナがヴェネツィアにフェラーラ領域での自由通行を保証してもらう布石になっていた。これらのことは、河川交通の維持が、政治的紛争の緩和に一役買っていたことを示していると思われる。主として用いた史料は以下の通りである。

- *I patti tra Venezia e Ferrara dal 1191 al 1313 esaminati nel loro testo e nel loro contenuto storico*, Benedetto Ghetti (ed.), Roma 1906.
- *Liber privilegiorum comunis Mantue,* Roberto Navarrini (ed.), Mantova, 1988.
- A. S. Minotto. *Documenta rhodigium policinum ac marchiones estenses,* Venezia, 1873.
- L. Astigiano (ed.), *Codex diplomaticus cremonae 715-1334*, vol. 1, Bologna 1983 (Ripr. dell'ed: Torino, 1896).
- ASVe, pacta e aggregati, reg.3.
- ASVe, *Miscellanea atti diplomatici privati.* b. 4.
- F. Fiorese (ed.), *Rolandino. Vita e morte di Ezzelino da Romano. Testo latino a fronte*, Arnoldo Mondadori Editore, 2010.
- *Chronicon Marchiae Tarvisinae et Lombardiae* (aa. 1207-1270), in RIS tomo 8, parte 3, Città di Castello, 1900.
- *Annales Veronenses III, Annales Parisii de Cereta a. 1117-1277*, in MGH scriptores XIX, Hannoverae, 1866.
- *Annales Mantuani, a. 1183-1299*, in: MGH scriptores XIX, Hanoverae 1866.
- *Annales Placentini Ghibellini a 1154-1284*, in MGH scriptores XVIII, Honnoverae 1863.

⑶バッサーノとヴェネツィアの関係についての調査では、バッサーノとヴェネツィアは、木材流しというブレンタ川を通じた経済的関係で結ばれていたこと、そのことは、ヴェネツィアとパドヴァの協約にも影響を与えていたことが明らかとなった。バッサーノはヴィチェンツァとパドヴァの間で、独立を保つことが難しい準都市であったが、ブレンタ川を通じてバッサーノ方面からヴェネツィアに向かう木材がヴェネツィアにとって重要であった、という事実は、領主層を含む近隣諸政治勢力が盛衰する中で、バッサーノが存在感を維持するひとつの理由となったのではないだろうか、という展望が得られた。また、今回の研究では、バッサーノをめぐるパドヴァとヴィチェンツァの紛争の詳細には立ち入ることができなかったので、今後の課題としたい。主として用いた史料は以下の通りである。

- *I documenti del comune di Bassano dal 1259 al 1295*, F. Scarmoncin (ed.), Editrice Antenore, Padova 1989.
- *I capitolari delle Arti Veneziane sottoposte all giustizia e poi alla giustizia vecchia dalle origini al MCCCXXX,* vol II, parte 1, G. Monticolo (ed.), Roma 1905.
- *Statuti del comune di Bassano dell'anno 1259 e dell'anno 1295,* G. Fasoli (ed.), Venezia 1940.
- G.VERCI, *Storia della Marca Trivigiana e Veronese di Giambatista Verci*, tom. 5, Venezia 1787.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 ダリオ・カンツィアン（著）、高田京比子（訳／解説）	４．巻 31
２．論文標題 アドリア海、アディジェ川、アルプスの間（現在のヴェネト地方）における資源管理と政治軍事的戦略（12-15世紀）	５．発行年 2016年
３．雑誌名 神戸大学史学年報	６．最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 0912-6538	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 高田京比子	４．巻 55
２．論文標題 新刊紹介「ヴェネツィアのテリトーリオー水の都を支える流域の文化（樋渡彩・法政大学陣内秀信研究室編）」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日伊文化研究	６．最初と最後の頁 127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 0288-1802	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 TAKADA Keiko
２．発表標題 How to keep fluvial trade?: Conflicts and Negotiations of the Medieval Italian City- States,
３．学会等名 The 14th International Conference on Urban Histroy (EAUH Rome 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko TAKADA
２．発表標題 A port-city as a step to the sea for hinterland people : a case of Venice in the Middle Ages
３．学会等名 The 8th International Conference of the World Committee of Maritime Culture Institutes (WCMCI) Retrospect and Prospect of 10 Years’“Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高田京比子
２．発表標題 カンツィアン氏の講演に対するコメント
３．学会等名 ヴェネトの領域史（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 高田京比子、ダリオ・カンツィアン、ジャン・マリア・ヴァラニーニ、パオロ・ピリッロ、大村拓生	４．発行年 2020年
２．出版社 高田京比子、神戸大学人文学研究科	５．総ページ数 138
３．書名 河川をめぐる中世の政治権力と経済ーイタリア（ヴェネト・トスカナ）と日本（畿内）	

１．著者名 高橋進・村上義和編著	４．発行年 2017年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 366（担当分６頁）
３．書名 『イタリアの歴史を知るための50章』（担当：第Ⅱ部⑥　「コムーネの誕生と展開―11～13世紀頃の様相」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考